

陳澄波の美術活動とその影響について

王 宇鵬*・福田 隆眞

On the Activity of Cheng Chen Poh and His Influence to Art

WANG Yupeng*, FUKUDA Takamasa
(Received January 7, 2015)

キーワード：エリート教育、画風、台陽美術協会

はじめに

1895年から1945年までの50年間の台湾の歴史は日本の植民地統治の下で生み出されたものであった。この50年間の間に、第一代西洋画家が現れ、第一代東洋画家も出現した。彼らは台北を中心として、植民地政府の行った美術展覧会を主な活動とした。東京「帝展」の画風を模範として、西欧の絵画によって「新美術運動」を行った。したがって、台湾の近代美術の最初の段階は日本植民地統治とは分けられなかった。もともと台湾の文化は中国の文化の延長であるが、台湾は日本の植民地になった後、文化の本質は植民地文化の比重が高くなった。美術の領域の中に、この植民地文化が特に顕在していた。従って、この期間の歴史には、植民地の観客的な条件で生じた産物であった¹⁾。台湾が日本に割譲されたため、政治の変化に従って、社会のそれぞれの方面の影響を受け、美術も例外ではなかった。しかし、美術は社会方面より影響を受けた時間が遅かった。教育の分野では、1912年に公学校（台湾国民の初級教育）に、図画授業が設立された。その授業の内容は、近代西洋美術を中心として、日本美術を含み、日本統治時代の第一新世代の人に影響していった（1895年以後、生まれた人）。美術の分野で、日本の画家達は台湾へ旅行し、写生し、絵画展を開催した。次第に台湾美術も日本の美術の影響を受けた²⁾。陳澄波はこの背景下にあり、1895年に台湾の嘉義市に生まれた。家の暮らしが貧しく生活が苦しいため、彼は13歳で公学校に入り、その後、台北の台湾総督府国語学校（今の国立台北教育大学）に入学した。彼は在学中に、英国紳士風情でありながらも漢文学に興味を持ち、美術教育に情熱を注いだ図画教師・石川鉄一郎（1871-1945）に出会った。その結果画家になる夢を抱くようになったとしても、それは当然の成り行きだったのかもしれない。公学校の教職に就いた後、その夢を実現すべく、彼は1924年に日本に留学した³⁾。1927年に日本東京美術学校を卒業した。彼は帰国した後、台湾や中国大陸の美術に影響を及ぼした人物であるので、本稿は陳澄波の活動とその影響について述べる。

1. 陳澄波の教育背景

1-1 当時の教育背景

日本の統治教育の50年間の中で、1919年（日治第24年）を転期として、「台湾教育法」が公布された。「台湾教育法」は、小学校、公学校、専門学校、師範学校等、共通の教育を目指すものであった。総督府が計画下の台湾初等教育を早期に始めた。しかし、台湾人は「公学校」で受けることが出来るだけであり、「小学校」は日本人の子どもが受けていた。前者は字が読める教育であり、後者は国民教育であり、両者ははっきり区別されていた。1903年（日治第8年）以後、美術、工芸、家事等の芸能科目が増設された。同じ年、国語学校でも、図画の授業が開始された。その後、台北第三高等女学校が独立し、美術の科目も設置された。（1919年、国語学校は台北師範学院に変わった。）台湾近代美術の第一代の画家たちは公学校を卒業した後、より高等の学府に入ると、美術教師の指導と啓発の機会を与えられた⁴⁾。陳澄波は1907年に嘉義公

* 山口大学大学院教育学研究科美術教育専修

学校に入学した。公学校の教育目的は日本語を教えることであった。当時の図画教育は形体の描写能力と審美感の養成を重視していた⁵⁾。

1896年、台湾の総督府は「芝山岩学堂」を「国語学校」に改名し台北の南門の近く（今愛国西路の台北市立師範学院）に移転した。7月に国語学校は師範部甲と師範部乙を別々に設置した。甲科という師範部とは中学学歴を持つ日本人が就学したものであり、在学期間は1年間であった。乙科という師範部は14歳以上、20歳以下の小学校から卒業した台湾人の在学したものであり、在学期間は4年間であった。主な目的は公、小学校の教師と教育行政人材を育成していくことであった。教育課程は国語（日本語）と数学、歴史、体操、必修科目「図画」、選択科目「手工」等であった。これは台湾の子弟が美術の教育を初めて受けたものであった。1907年に石川欽一郎は台湾に到着し、台湾総督府陸軍の翻訳官を務めていた。そして、同時期に国語学校で「図画」の教師を兼任し、自由で開放的な教授法で、数名の台湾の青年の学生を啓蒙していた。後に、彼らを日本へ留学するように励ました⁶⁾。

一方、陳澄波は1913年に台北国語学校師範部に入った。その時の学校教育は、前年度に設立されていた「手工と図画」科による写生画や考察画等が含まれていた。図画授業が公学校の教育科目の中に入れられ、台湾の児童は西洋美術教育を初めて受けることになった。これも陳澄波の美術啓蒙の重要な段階であった。陳澄波は公学校を卒業した後、当時の台湾の学生たちから憧れていた最も優秀な台北国語学校に入学した。陳澄波が生まれた時代は、中日の文化が盛んな時期であった。陳澄波は、前清時代の秀才（科挙受験資格を有する）の父親の影響を受けて、伝統的な漢文化と書道（図1）に対しても深い教養を持っていた。

陳澄波と同年代生まれの倪蔣懷、劉錦堂、黄土水等は、陳澄波が国語学校師範部に入学する頃には既に卒業し、教鞭をとりながら、東京美術学校へ留学を希望していた。その時の陳澄波は、芸術の道の第一歩を踏み出したばかりであり、水彩画で名高い師匠である石川欽一郎に出会うことによって、石川の描いたすばらしい台湾の風景画に感動していた。陳澄波は卒業後、芸術の道を歩んでいるなかで悩み苦しんだ時に、手紙を通して石川欽一郎に教えを請っていった。石川は、陳澄波に積極的に意見を与えた。彼は、陳澄波の創作の生涯の中で、かけがえのない重要な人物として存在していた。

石川について、成功大学歴史学部副教授・蕭瑞瓊は次のように述べている。「夜がまだあけきらぬ時に灯りを掲げて、山道で台湾の若き画家たちの手を引いてくれた著名な水彩画家の美術教師」。しかし、陳澄波の作品を仔細に検討してみると、その中には石川欽一郎の影響があまり見当たらないことが分かる。石川が陳澄波に与えた影響は絵画の技術的な啓蒙にとどまらず、もっと重要なのは、石川が陳澄波の個性を理解して、彼が自分自身のスタイルで絵画を描く道に乗り出していくのを支援したのである。なにゆえ陳澄波の作品には個性的な色彩が明らかで、素朴で天真爛漫だったのか。例えば画家の謝里法が「素人画家」の気質を帯びている原因はどこにあるのか？と言っていたのもこうしたあたりであろう⁷⁾。

1-2 エリート教育—陳澄波の養成

1895年、日本は日清戦争によって、台湾を占領した。時代が変わり、新しい政治権力、新しい国語、植民地政府が設定した基礎教育綱領が出現した。植民地政府は台湾を占領した後、最初に台湾の人々を改変した。伊澤修二（1851～1917）が総督府民政局学務部の教育計画に従事した。彼は「国語政策」を頑として掲げ、1896年、台北の芝山岩で、「国語学習所」を設立した。それから、徐々に全台湾に及んだ。植民地教育制度は台湾教育の発展の速度を速めた。これは事実である⁸⁾。一方、総督府は台湾の教育を実施した時、日本語と初級養成クラスの実施に限っていたため、中等学校は足りず、社会の中上階級の人々は日本に留学するしかなかった。植民地政府の公学校教育は、強制義務教育を採用していなかったため、入学者の家庭は中上階級家庭であった。1919年以前には、公学校の拡充は遅く、入学率も低く、特に台湾の農村の子どもたちは、貧困と労働力の不足等の要因のために、教育を受ける機会が足りなかった。したがって、1918年まで、全台湾の公学校の卒業生は、台湾総人口の百分の一であった⁹⁾。この時代の台湾教育は「エリート教育」と呼ばれた。

2. 絵画創作と創作風格

2-1 絵画創作の三大段階

(1) 第一段階「東京時期」東京美術学校で図画師範科の在学期

陳澄波は専門の美術教育を受けるとともに、自己を探究する絵画表現も追い求めた。そして、印象派画家ゴッホの影響を受けたため、陳澄波の画風は野獣派の表現へと変わっていった。

1924年3月に陳澄波と廖繼春は基隆から船で日本に到着した。先輩張秋海の助けのもとで、入学手続きを終えた。そして、二人は特別生（デッサンだけを試験する）として、順調に東京美術学校図画師範科に合格した。現在の記録によると、1924年に東京美術学校に入る前の陳澄波は油絵を学ぶ機会がなかった。従って、彼は東京美術学校と本郷美術研究所（岡田三郎助が指導）の間で奔走していた。以下は東京美術学校図画師範科の教育内容である¹⁰⁾。

表 1 東京美術学校図画師範科教育内容

	入学試験科目	写生	図案	用器画	(英語)	日本語作文	歴史	書道	身体検査		
第一年	修身・道徳 (毎週1時間)	教育学・心理学 (毎週2時間)	教学法・教学練習 (毎週3時間)	東洋美術史 (毎週2時間)	図案法・色彩学 (毎週2時間)	英語 (毎週2時間)	絵画 (日本画・油絵)・図案 (毎週15時間)	用器書道・製図 (毎週3時間)	工芸 (品物を制作する 毎週5時間)	書道 (毎週3時間)	体操 (毎週2時間)
第二年	修身・道徳 (毎週1時間)	教育学・心理学 (毎週2時間)	教授練習 (毎週2時間)	東洋美術史 (毎週2時間)	図案法・色彩学 (毎週2時間)	英語 (毎週2時間)	絵画 (日本画・油絵)・図案 (毎週15時間)	用器書道・製図 (毎週3時間)	手工 (品物を制作する 毎週5時間)	書道 (毎週3時間)	体操 (毎週2時間)
第三年	修身 (毎週1時間)	教育学・教授練習 (毎週2時間)	美学 (毎週2時間)	英語 (毎週1時間)	絵画 (日本画・油絵)・図案 (毎週15時間)	用器書道 (毎週2時間)	手工 (彫刻を含む 毎週5時間)	書道 (毎週3時間)	体操 (毎週2時間)		

このような過密な学業の下で、陳澄波と廖繼春は順調に卒業した。東京美術学校図画師範科の三年間の間に、学生たちは多くの授業を履修する必要があった。美術の授業について、上述の時間割によると、西洋絵画の技法を学ぶほかに、東洋の膠彩画の技法も学んだ。陳澄波は膠彩画を排斥することなく、油絵に一層熱中した。現在、彼の残した膠彩画の作品は非常に少なく、その絵の大部分は大学時代の習作であった。

《外出》(図2)は、陳澄波の美術学校3年生の時に描いた膠彩画作品である。この絵の中で、和服を着る女子は観衆に面して歩いて来ている。この絵はきめ細やかな手法を使っており、画面は簡明な効果が見られる。しかし、彼の油絵の風景画と比べて、膠彩画は一層堅苦しいことを示している。この堅苦しさが彼にとって、膠彩画を意欲的に創作できなかった原因なのであろう。《深く考え》(図3)は彼の1926年の膠彩画の作品である。この絵の中で、女性の座っている姿を平塗りの技法で表現しているが、依然として堅苦しく感じる。彼の描いた膠彩画からすると、いくつかの絵画の弱点を見分けることができる。《外出》と同じように、人物の手の描写からすると、膠彩画のみならず油絵も十分には自信がなかったように思われる。人物の四肢の割合および手の描写は、陳澄波にとって、正確に処理しにくい難題であったのであろう。実は、陳澄波のデッサンは充分ではなかった。従って、彼は物体の構造を丁寧に表現することができなかったように思う。しかし、自らに非常に高い要求を求める陳澄波は、長時間の練習を通して、欠点を長所に変える秘訣を生み出した。これは、自分の特色に属する「修飾しない色彩の筆触」であった。それも、彼の画面に生命力を満たした要素であった¹¹⁾。

1926年に、《嘉義街外》(図4)の作品が第7回「帝展」に入選した。(帝展とは帝国美術院展覧会の略称で、現在の日展。なお、帝展に台湾人として最初に入選したのは彫刻の黄土水であり、陳澄波は画家として初めて)。この作品は、真ん中に一本の畔道があり、両側に縦並びの家および電柱を描いている。物体の並びは、秩序があるような遠近感が伺える。この1年から2年の間に、陳澄波は空間の描き方の課題を解決していったように思われる。また、この絵の中の面白さは、物語性があり、唐傘をさしている人物や肩に天秤棒をかついでいる人物などを表現することにより、当時の生活背景も感じられる。

(2) 第二段階「上海時期」美術教育に従事する黄金期

陳澄波は1929年—1933年まで、中国大陸に滞在し、この期間に、上海の新華芸術専門学校の西洋画主任、昌明芸術専門学校の教科主任、芸苑絵画研究会の名誉教授を務めた。芸苑とは、自由研究を重視する若手画

家たちが上海で創った研究所で、日本画壇と関係が近く、中国近代美術に重要な役割を果たしたグループであった。1929年に芸苑が出版した『芸苑概況』の「創立宣言」によれば、江小鶴、張辰伯、朱屺瞻、王濟遠が1928年10月1日に絵画研究所を立ち上げた¹²⁾。1929年、国民政府教育部が陳澄波を日本美術工芸特別考察員に委任した。同年、福建省の美術展覧会と上海市の全国美術展覧会の西洋画部の審査委員を務めた。1930年、上海市全国中等学校の教員と夏季の油絵講習会の講師及び上海市中等学校の図画科監査官を務めた。陳澄波が上海の「全国訓政記念総合芸術展覧会」で、「現代の油絵を代表する十二大家」の一人として推薦して選ばれた（出展作品は「西湖の断桥の残雪図」）。そして、「シカゴ博覧会の現代美術展覧会」に参加した¹³⁾。陳澄波は全身全霊を美術教育事業に捧げ、中華文化の研究をすると同時に、台湾と日本との絵画活動も積極的に参加した。例えば、1929年『早春』の画は、第三次「帝展」に入選した。そして、毎年の夏、彼は台湾に戻って、作品を創作し、絵画展に参加した。

（3）第三段階「郷土に戻る時期」祖国と郷土

陳澄波は台湾の各地の風土や情景を観察し、淡水や嘉義等の地方の風景を描くことによって、自分の芸術家としての絵画生命の頂点に達した。そのことで陳澄波はその時代の代表的な人物として認められた。彼は当時の青年としての普遍的悩みと矛盾を持っていた。彼の悩みは手に一本の筆を持ったとしても、その筆で、植民地下の精神と思想を描き出すことができなかつたことである。矛盾は祖国（中国大陸）と郷土（台湾）の両方に同時に気を配ることができなかつた。彼は愛国者であるとともに、愛郷者でもあった。これは彼を中国大陸と台湾の両方に奔走させた。陳澄波の帰台は、台湾の画壇の力を高めただけではなく、中国大陸の美術の表現形式と思潮を台湾の画家たちに紹介した。彼の最終的な希望は隔絶する状態下の中国大陸と台湾に、台湾のような画壇の架け橋を作ることであった。

2-2 創作様式と絵画材料について

日本画壇に東洋回帰が流行した時期、陳澄波は日本に留学した。彼は台湾、中国、日本と密接な関係を持っていたが、彼の美術の様式は三ヶ国のどの国にも傾かず、自分の風格を持つ美術を創出した。陳は近代絵画の象徴である油彩での伝統的水墨画の再生を試みた。水墨画への関心は日本美術界と中国美術界の共通の傾向であったが、陳は他の中国画家と違って、中国の「国画」と呼ばれる水墨画を創作しなかつた。陳は日本で身につけたアジアでは最先端の油彩技法を基にして、水墨画の筆法と構図を用いて、近代版の「伝統絵画」を創作しようとした¹⁴⁾。

上海にいた頃から、陳は絵画の筆法に特に関心があり、芸苑を通して水墨画家張大千（1899—1983）兄弟潘天授（1897—1971）などと交流し、古画に関する研究をした。例えば、《琳琅山閣（逸園）》（図5）について、陳澄波は以下のように述べている。「逸園は嘉義の医師張錦燦の庭園の一部で、中国古来の画風を真似て、東洋的気分にて之を現はした一幅の南宗絵です（下略）¹⁵⁾。」本作に強調された線の趣独特な構図はその努力の結果であり、陳は油彩を用いて現代風南宗画を試みたのである。

上海の長年の経験と鍛練のため、陳澄波は自分の画風について、さらには台湾の絵画界の発展に対する独特な見方があった。1934年に彼は『台湾新民報』で文章を発表し、「私が表現したいのは線の動感、そして渴筆の技法を使うことで、画の全体に活気が行き渡るようにすることです。または、言葉では伝えられない、ある神秘的な力を画の中で表現することとも言えるでしょう。私は作品を作る際、これらに気を付けています。私たちは東洋人であり、西洋人の画風を鵜呑みにしてはいけません。」¹⁶⁾と述べた。陳澄波の円のアーチ形の構図は、彼が描いた絵の中で、よく出現する視覚言語のひとつである。日本での在学期間（1924—1929）、上海の教員を務める期間（1929—1933）、台湾へ帰る期間（1933—1947）の作品が構図の形式上で変わったところであった。しかし、彼は円のアーチ形の線で表現するのを好んだ。図（6—8）から見ると、円のアーチの構図が見える。それは作者が景物を観察する主観性と創作態度に表れていた。

3. 「台陽美術協会」の成立とその時代の画家たちの意識

陳澄波は絵を描くほかに、積極的に台湾の画会に参加し、活動した。以下は陳澄波が参加した画会である¹⁷⁾。

表2 陳澄波の参加した画会

1925年	「春光会」	陳澄波と陳植が東京美術学校で、留学する台湾の学生を連合し、美術を研究する「春光会」を創設するつもりであるが、黄土水の反対のために断念した。
1926年	「七星画壇」	陳澄波と石川鉄一郎が台北師範大学で、教えた学生たちと「七星画壇」を創設した。
1927年	「赤陽会」	陳澄波と東京美術学校の友人が「赤陽会」を設立し、台南工会堂で作品を展示した。
1928年	「赤島社」	陳澄波と顔水龍、廖繼春、何徳來、李梅樹、楊三郎、郭柏川、陳慧坤等十三人の藝術家が「赤島社」を創設した。
1934年	「台陽美術協会」	陳澄波、顔水龍、廖繼春、陳清粉、李梅樹、李石樵、立石鐵臣等「台陽美術協会」（台陽美協）を創設した。
1940年	「青辰画会」	嘉義で行われ、陳澄波が指導顧問になった。

「台陽美術協会」は台湾美術に対する深く影響を与えたため、「台陽美術協会」を通して、陳澄波及びその時代の画家たちの意識について述べる。

陳澄波は上海で美術教育に従事しながら、毎年作品を台湾に郵送し、展覧会に参加していた。そして、手紙のやり取りで、台湾の友人の民間絵画団体の設立を支援した。それが、「台陽美術協会」へと発展した。1933年に「台陽美術協会」の準備活動は積極的に行われていた。陳澄波は中国大陆の教師の仕事を辞職した後、台湾に戻った。彼を中心として台湾の青年画家の顔水龍、廖繼春、陳清粉、李梅樹、李石樵、立石鐵臣等と共同して¹⁸⁾、1934年11月10日に台北鉄道ホテルで最強の組織と最大の陣容と質の高い民間美術団体「台陽美術協会」を設立した。以降、毎年春には「台陽美術協会展」が行われた。

ある評論家は「台湾の美術界は強力な団体がなくてはならないと思っていた。一方、芸術の領域で中華民族の特質を発揮することができた。一方、この団体の力を利用して、日本の文化と圧迫に抵抗した。これは台陽美術協会の誕生の二つの要素であった」と述べた¹⁹⁾。ある評論家は「台陽美術協会」の設立は「台展」と対立し、「府展」を反撃する団体だと思った。しかし、「台陽美術協会」の目的と意義は何だろうか。日本の文化に抵抗するかどうか。『台湾美術運動史』の著者の謝里法によると、画家たちは「台陽美術協会」を設立する原因は日本の文化に抵抗することなく、画家たちは「台陽美術協会」を単純な美術団体とした。その目的は毎年の作品の発表会であった。1954年に楊三郎は「台陽美術協会は他の目論見がなく、美術を研究する団体であった。」²⁰⁾と言った。このことが正しければ、日本に抵抗するような活動はなかった。この点も画家たちは政治に関連していないことを証明している。画家たちの芸術に対する熱情は他のことより重要であった。

おわりに

本稿は陳澄波の活動の概略を述べ、彼の美術に対する意識を態度について触れた。陳澄波は東京美術学校で西洋の絵画を学び、台湾と上海において、西洋の絵画の画風と中国の伝統絵画の精神と言語を融合した。そして油絵具による絵画によって台湾と中国の風景や人物の個性的な表現を行った。特に、濃くて、激しい色彩で自分の内面を表現した。そして、彼の作品は生命力を満ちあふれる表現となった。それは日本画が台湾に根付いて膠彩画となっていったことと同じように、油絵具によるローカルカラーの表現といえる。台湾の日本統治時代に日本に留学した台湾の学生は、卒業後、台湾で美術活動を継続し、台湾の近代美術の一翼を担って行った。陳澄波はその中でも活発な活動によって、台湾の近代美術運動に大きな影響を及ぼした。

陳澄波は画家でありながら嘉義市の議員を勤め、二二八事件で亡くなった。このことにより、政治的な活動の評価が付加され、歴史に残ることとなった。嘉義市文化会館の一角に設置された陳澄波記念館には、彼の生涯にわたる活動の記録が展示されている。展示のほとんどは画家としての活動の記録であった。²¹⁾

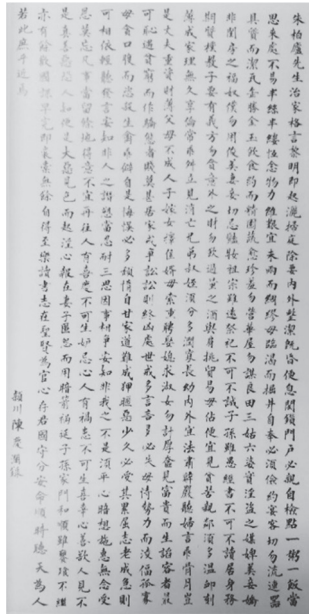


图 1

《朱柏廬治家格言》139×69cm年代不詳



图 2

《外出》膠彩120×54cm 1926



图 3

《深く考え》膠彩 126×111cm 1926年

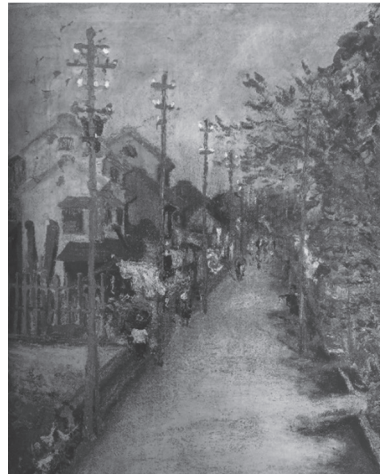


图 4

《嘉義街外》油画 64×53cm1927年



図5
《琳琅山閣》（原名《逸園》）1935年、
油彩、画布、73×91cm、個人蔵



図6
《淡水中学》 油絵 91×116.5cm
第十回「台展」に展示された



図7
《台湾の農家》 油絵53×45.5cm 1932年



図8
《嘉義の公園》 油絵 60.5×72.5cm 1937年

付記

本稿はJSPS科研費24531091「アジアの芸術教育における西洋の影響と独自性の形成に関する研究」（佐々木幸代表）の研究の一部である。

注

- 1) 謝里法：『日據時代台湾美術運動史』，藝術家叢刊②，藝術家出版社，p. 18.
- 2) 『何謂台灣？近代台灣美術與文化認同』，雄獅美術月刊社，中華民國86年2月18日p231.
- 3) 森美根子：『台湾を描いた画家たち』，産経新聞出版，p. 49，平成22年.
- 4) 李欽賢：『台湾美術閱覽』，玉山社，pp. 41-42，2006.
- 5) 羅淑慧：碩士論文，『日治時期的台灣留日美術家-以東京美術學校為研究中心』，國立中央大學，2009，未出版.
- 6) 林育淳：『油彩・熱情・陳澄波』雄獅圖書株式会社，p. 16，1989.
- 7) 公共電視台・企画，『台湾百年人物誌 1』，玉山社，2005.
- 8) 李欽賢：『台湾美術閱覽』，玉山社，p. 37，2006.
- 9) 吳文星：『始終未能與日本人平等共學』，日本文摘100期『太陽旗下的台灣特刊』，p. 95，1994.
- 10) 吉田千鶴子、石垣美幸譯：『檔案・顯像・新「視」界-陳澄波文物資料特展暨學術論壇論文集「陳澄波與東京美術學校的教育」』，嘉義市政府文化局，pp. 21-25.
- 11) 林育淳：『油彩・熱情・陳澄波』，雄獅圖書株式会社，p. 43，1989.

- 12) 「創立時宣言」, 『芸苑絵画研究所概況』上海、芸苑絵画研究所, 1929『時代画報』に創立日が記入されている。上海、1929年、1期、p31.
- 13) 王白淵: 「台湾美術運動史」, 1955年『台北文物』季刊第三卷第四期“美術運動專号”.
- 14) 羽田ジェシカ: 「植民地期台湾のアイデンティティー陳澄波と劉近錦堂を中心に」.
- 15) 『台湾新民報』, 1935年秋, (陳澄波遺品、日付なし) .
- 16) 林育淳: 『油彩・熱情・陳澄波』, 雄獅圖書株式会社, p. 106, 1989.
- 17) 同上 p. 107.
- 18) 謝里法: 『日據時代台湾美術運動史』 p. 153.
- 19) 前掲書p. 15.
- 20) 謝里法 『日據時代台湾美術運動史』 p. 156.
- 21) 2014年11月の現地調査による。

図版出典

図1-8 林育淳: 『油彩・熱情・陳澄波』, 雄獅圖書株式会社, 1989年.